

平成26年 2月

# 藤原美智子 学位論文審査要旨

主 査 鈴 木 康 江  
副主査 花 木 啓 一  
同 吉 岡 伸 一

## 主論文

青年期における親密な関係の若者間の暴力被害に関連する要因について

(著者：藤原美智子、吉岡伸一)

平成26年 米子医学雑誌 掲載予定

## 参考論文

1. デートDVの実態調査：背景因子と健康への影響について

(著者：上杉有加、大島麻美、背戸美希、田根なつみ、藤井公美、鈴木康江、  
山根（藤原）美智子、藤田小矢香、池田智子、遠藤有里、南前恵子、笠城典子、  
前田隆子)

平成25年 日本医学看護学教育学会誌 22巻 2頁～6頁

# 学 位 論 文 要 旨

## 青年期における親密な関係の若者間の暴力被害に関連する要因について

青年期の若者において、親密な関係の男女間で起こる暴力は、総称してデートDV (dating violence) と呼ばれ、近年、デートDVの被害が問題となっている。デートDVは、被害が表面化しにくく、実態の把握や被害者の救済が困難である。デートDVは、将来的にドメスティックバイオレンスへ移行する可能性があり、デートDV防止のための教育が求められている。そこで、若者のデートDV被害の実態を明らかにし、また、被害者の支援対策に向けての基礎資料を提供することを目的として、暴力被害に関連する要因について調査した。さらに、実際の被害経験が精神健康面に与える影響について検討した。

## 方 法

A 県内の大学生・専門学校生を対象に、無記名自記式の質問紙法を実施した。対象者の基本的属性（年齢、性別、住環境）、デートDVに関する知識、暴力に対する認識、暴力を容認する意識、ジェンダー意識、コミュニケーション・スキル、精神健康度、暴力被害の実態について調査し、統計学的に解析した。なお、対象者に、研究目的・方法・守秘義務を紙面ならびに口頭で説明し、調査を依頼した。

## 結 果

配布した質問票 631 中の回収数は 580 で、うち有効回答 536 であった。恋人が現在または過去にいる人は 348 名 (65.0%) であった。デートDVの知識は「言葉も内容も知っている」が 302 名 (56.3%) であった。暴力に対する認識は、暴力と認識されにくい項目は「押したり、つかんだり、つねったり、こづいたりする」70.3%、「外出や友好関係をチェックする」56.1%であった。暴力を容認する人が多かったのは、「軽くたたく程度なら、特に問題ない」80.2%であった。ジェンダー意識は、昔からの性別役割意識を持っている者が存在した。若者のコミュニケーション・スキル得点は平均と比較し、関係維持や他者受容の得点が高く、表現力と自己主張の得点が低かった。精神的に不健康な者は、152 名 (28.4%) であった。恋人がいた 348 名中、恋人から暴力被害を受けた経験が一度でもあると回答した者は 183 名 (52.6%) であった。多かった項目は、「押したり、つかんだり、つねったりこづいたりする」28.4%、「相手の意見を聞かず自分勝手に決める」19.5%、「外出や友好関係をチ

ェックする（携帯・メール等）」17.5%、「行動を制限または監視する」16.4%であった。

関連因子の相関関係では、知識は、暴力認識度、コミュニケーション・スキル度と正の相関を、暴力許容度、ジェンダー意識度と負の相関を示した。また、暴力認識度は、コミュニケーション・スキル度と正の相関が、暴力許容度およびジェンダー意識度と負の相関が認められ、暴力許容度は、ジェンダー意識度と正の相関が認められた。さらに精神健康度は、コミュニケーション・スキル度と負の相関を示した。

## 考 察

恋人から暴力被害を受けた経験が一度でもある者が半数と多く、被害の多い項目は、身体的なものでも程度の軽いもの、精神的なもの、社会的なものであった。また、相手を支配・服従する種類の暴力に対する認識は低く、暴力を受け入れる傾向にあり、暴力を容認する意識について、程度の軽いものは暴力とは認識せずコミュニケーションの一環として捉えていると考えられた。さらに、暴力被害の関連因子間の関係では、暴力に対する認識の高い若者は暴力許容度が低く、暴力を許さず、ジェンダー意識も低い傾向にあることが明らかとなった。

暴力被害状況と精神健康度との間の関連性が示唆され、暴力被害の類型別では、身体的・精神的・性的な暴力より、社会的・経済的な暴力の被害が精神健康度への影響が強いことが示唆された。比較的軽い被害でも、精神健康面への影響は大きく、被害を受けた若者へのケアが必要であると考えられる。また、被害状況とデートDVの知識、コミュニケーション・スキルとの間の関連は低かったが、暴力に対する認識や暴力を容認する意識が暴力被害状況に関連することが示唆された。

## 結 論

デートDVの知識のある学生は半数以上と多く、暴力被害を受けた学生は、恋人のいる学生の半数であった。暴力被害の経験者は、暴力を容認する意識が高かった。また、被害学生の精神健康度への影響は、身体的・精神的・性的暴力より、社会的・経済的な暴力が強かった。若者の暴力被害を減らすためには、暴力はよくないという認識を若者が持ち、心身への影響についても理解し、暴力は自分が傷つくことから“受け入れてはならないもの”と感じられるような予防教育が必要である。